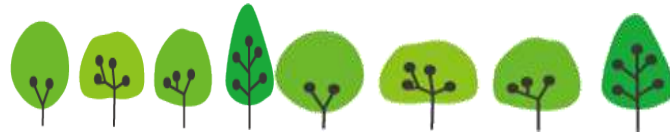


いちりん通信

No.33

ターミナルケア



【症例報告】

新宿区 H様 78歳 男性 肺ガン末期 週3回治療

肺ガンが転移していたHさんは、口癖のようによくこうおっしゃっていました。

「もう俺、ダメかな？先生。まだ、こうして息できてるし、座れるし、まだ大丈夫だよな？先生。」

私たちは肯定も否定もせず、ただじっとHさんの目を見つめて、うなずくだけ…。

その1 ただ、ひたすらに傾聴する

Hさんはご家族にとっても感謝していました。「こんな身体になっちまって、家族には迷惑かけてばっかで…ほんと申し訳ないって思ってた。」

しかし、いざ家族の前となると、いろいろな愚痴や甘えや孤独感が溢れ出て、なぜだか家族に当たり散らしてしまうHさん。

そんなHさんの複雑なお気持ちを、ただ私たちは聴いて差し上げるだけ…。

その2 私たちには何ができるのか？

肺ガンの末期になってくると、痩せ細り、在宅での酸素吸入が始まり、咳き込みがひどくなってきます。その度に、全身の筋肉をふり絞って咳をし、背中や胸郭回りはひどい筋肉痛を起こしています。

少しでも楽に寝て過ごせるよう、筋肉の負担をマッサージで軽くして差し上げます。

同時に、家族にもこういうケアをしてほしい、とマッサージの仕方を教え、家族が担えるところが沢山あることをお伝えします。

その3 やがて来るその時に向けて

すべての人に、《死》はあります。しかし、あまりにも非日常的な「その時」に、私たちもまたどう向き合っているのかわからず、ただ戸惑うばかりです。でも、それでいいんです。

私たちは患者様の傍らで、しっかりと手を握りしめています。

ご家族の傍らで、しっかりとお話しを受けとめています。それがターミナルケアであり、グリーフケアなのです。 (F・K)

